

四十八塚古墳群に埋葬された被葬者を考察する — 遺物・遺構及び人類学的な視点から —

たに 谷 畑 美 帆・中 村 享 史・内 山 とし 敏 行

四十八塚古墳群に埋葬された被葬者を考察する

— 遺物・遺構及び人類学的な視点から —

谷 畑 美 帆¹⁾・中 村 享 史²⁾・内 山 敏 行²⁾

はじめに

1. 佐野地域の古墳について
- 2 四十八塚古墳群について
3. 分析対象とする人骨資料について
4. 分析結果

①人骨資料と副葬品

- ②横穴式石室からみた四十八塚古墳群の様相
- ③小札甲を出土する群集墳としての四十八塚古墳群
5. 結果と考察
6. まとめ

栃木県城南西部に所在する佐野市四十八塚古墳群の成人人骨と歯牙から、各古墳に3体程度(2~4体)を北頭位で埋葬したことを推定した。横穴式石室は無袖型長方形と両袖型扇形に大きく分類できることと、古墳周溝や主体部の間に重複関係がなく、周溝を回避する事例があることを指摘した。石室内に複数体を埋葬する一方で栃木県中央部のような周溝内埋葬をしないことの物理的・社会的理由と、北関東西部で後期群集墳の中小円墳に小札甲を副葬する背景を検討した。副葬遺物との関係を検討すると、2体を埋葬するSZ-471とSZ-472は土器型式で1型式または2型式、3体または4体を埋葬するSZ-478では4型式に相当する埋葬期間を持つ。また、石室奥壁付近の被葬者に副葬品が多い傾向がみられた。

はじめに

古墳に埋葬された被葬者を考察する際には、副葬品が重視されることが多い。これに対して、被葬者そのものである人骨についての研究は少ない。これは、その遺存状態が不良であるため考察対象からはずされているのだが、人骨からは性別や年齢といった基本的な情報を抽出できず、出土時にただ破片として取り上げられ、資料としての情報を提示できないことが多かったからである。

しかしながら、人骨は古墳の内部主体から確実に出土しており、発掘調査時の詳細な取上げ作業によって、被葬者に関するある程度の情報を提示することは可能である。

本稿では、こうした状況を踏まえたうえで、遺存状態が不良な人骨資料および副葬品との関係を基に古墳に埋葬された被葬者について考察することとする。

1. 佐野地域の古墳について

渡良瀬川水系の河川のほとんどが足尾山地から流れ出ている。足尾山地は栃木県西部、日光より南に広がる山地である。西側は渡良瀬川によって群馬県域と画され、東側と南側は複数の河川によって開析され、台地、低地に接続し、東麓からは思川、赤津川、巴波川、永野川が、南麓からは三杉川、秋山川、旗川、袋川、松田川、小俣川、桐生川が流れ出ている。

1) 明治大学日本先史文化研究所 2) (公財)とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター

四十八塚古墳群が所在する佐野市域は、東は三杉川、西は秋山川、旗川の流域にある。旗川には彦間川、出流川が合流する。三杉川流域には米山古墳（木村・大橋 1986）、甲塚古墳（津野 2012）があり、その近隣には唐澤山ゴルフ場墳輪郭跡群（大川 1963）がある。三杉川の下流にはかつて越名沼があったが、現在は干拓で消滅している。秋山川は現在、直接渡良瀬川に合流しているが、かつては三杉川に合流していた。三杉川と秋山川に挟まれた地域には佐野台地、秋山川以西には渡良瀬川低地がある。秋山川と足利市東部の足尾山地南端に挟まれた、赤見町域では十二天塚古墳（矢島・茂木 1988）、中山 8 号墳、四十八塚古墳群（仲山・村田・亀田 2011）、市ノ沢古墳群がある。

四十八塚古墳群は、旗川と彦間川の合流点付近の旗川西岸の出流原台地に位置している。四十八塚古墳群では、1954（昭和 29）年に出流原古墳群として 6 基、2005（平成 17）年～2007（平成 19）年にはとちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センターの調査により、16 基の円墳が調査されている。個々の古墳は、円墳から成り、群内に前方後円墳が存在しない。このうち、SZ-33、SZ-335、SZ-471、SZ-472、SZ-473、SZ-478、SZ-480 の 7 基の古墳に横穴式石室が残存しており、SZ-334 は 1954（昭和 29）年に前澤輝政氏により調査された出流原 5 号墳と考えられる。（中村）

2. 四十八塚古墳群について

出流原古墳群と称されていた時期において、四十八塚古墳群の個々の古墳の墳丘は、すでに大部分が削平されており、横穴式石室と若干の覆土を残すのみであった（前澤 1977）。しかしこのうち 5 基の古墳の石室内から被葬者についての考察を進めていくことが可能な人骨片が出土していた。人骨の鑑定は鈴木尚氏により、複数個体埋葬と推されている。しかし、被葬者の頭位や埋葬姿勢については不明なままである。

その後、先述したようにとちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センターによる調査から計 16 基の古墳（直径 10-20 m 前後）が確認され、主体部のすべてが横穴式石室であることが明らかになっている。副葬品としては鉄製品（鉄鏃などの武器）、装身具（玉類など）、須恵器のほか、墳丘から埴輪が出土している。しかし、いずれの古墳の主体部においても副葬品と出土人骨は石室内に散乱した状態で見つかった。

中でも出土人骨は、細片や破片を中心としたものであり、こうした場合、形質人類学において重要とされる一部の人骨資料を除いて、骨片に関する詳細な考察はこれまでほとんど行われたことがない。そのため、このような状態で出土した人骨は、個々の部位を点あげし、図面上に落としていくという作業を必要とさせてくる。とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センターでは、被葬者の人数・頭位などを認識することが可能となるように、こうした発掘調査作業を通じて実施している。（谷畑・中村）

3. 分析対象とする人骨資料について

本節では、四十八塚古墳群の中でも、比較的まとまった状態で人骨が出土している SZ-33・SZ-471・SZ-472・SZ-473・SZ-478 の 5 基を取り上げる。いずれの古墳においても墳丘は存在していない。以下、個々の古墳とその人骨資料について概要を記述する。

- ① SZ-33（径 14 × 16 m の楕円形墳）には全長約 3.5 m を測る両袖型横穴式石室が造営されている。この石室は、奥壁部がやや狭まる胴張り形と推定されている。周溝は円形に巡り、墓道が接続する石室前面では溝の幅が広く深くなっている。この古墳に伴う副葬品はほとんど確認されていないが、細片・破片状態の資料を含む人骨が 176 点出土している。

- ② SZ-471 (径 20m の円墳) には全長 3.4 m を測る両袖型横穴式石室が造営されている。この石室は、奥壁部がやや狭まる胴張り形と推定されている。周溝は円形に巡り、墓道が接続する石室前面では溝の幅が広く深くなっている。須恵器・土師器は墓道より出土しており、須恵器は周溝覆土からも出土している。このほか、細片・破片状態の資料を含む人骨が 54 点出土している。
- ③ SZ-472 (径 16 m の円墳) には全長 2.6 m を測る無袖型横穴式石室が造営されている。周溝の状況から考えて、SZ-471 より先に造られた可能性がある。本石室の平面形はほぼ長方形であり、奥壁部がやや狭まるものの胴張り形状にはなっていない。周溝は円形に巡る。須恵器は周溝覆土から出土しており、石室からは直刀や鉄鏃など武器を中心とした鉄製品のほか、耳環やガラス玉などの装身具が出土している。細片・破片状態の資料を含む人骨が 28 点出土している。
- ④ SZ-473 (径 9m の円墳) には全長 2.4 m を測る両袖型横穴式石室が造営されている。石室の平面形はほぼ長方形であり、奥壁部がわずかに狭まり胴張り形状と推されている。周溝は円形に巡り、墓道が接続する石室では溝の幅が広く深くなっている。須恵器は周溝覆土から出土しており、石室からは装身具(耳環)が出土している。細片・破片状態の資料を含む人骨が 36 点出土している。
- ⑤ SZ-478 (径 20m の円墳) には全長 4m の無袖型横穴式石室が築造されている。石室の平面形はほぼ長方形であり、羨道部側がわずかに狭まる程度であり、胴張りではないとみなされる。周溝は円形に巡り、一部は浅く幅が広くなっている。須恵器および埴輪は周溝覆土から出土しており、特に埴輪片は多く本古墳が埴輪を有するものであると考察されている。中でも多く出土している埴輪片の大半は円筒埴輪であることが明らかにされており、人物埴輪と馬形埴輪も出土している。石室からは直刀・鉄鏃などの武器を中心とした鉄製品のほか、髯引手が出土している。この他装身具として耳環 1 点、および玉類が約 100 点(碧玉製管玉 12・土製管玉 2・水晶製切子玉 1・滑石製白玉 4・土製小玉 26・ガラス小玉 94)が出土している。このうち最も多く出土しているガラス小玉は青色のものが多いが、黄色や緑色を呈するものもある。細片・破片状態の人骨が 116 点出土している。

以上、5 基の古墳の石室内より出土した人骨資料の出土地点と部位同定の結果を併せて、被葬者の頭位・人数・副葬品との関係について述べていくこととする。(谷畑)

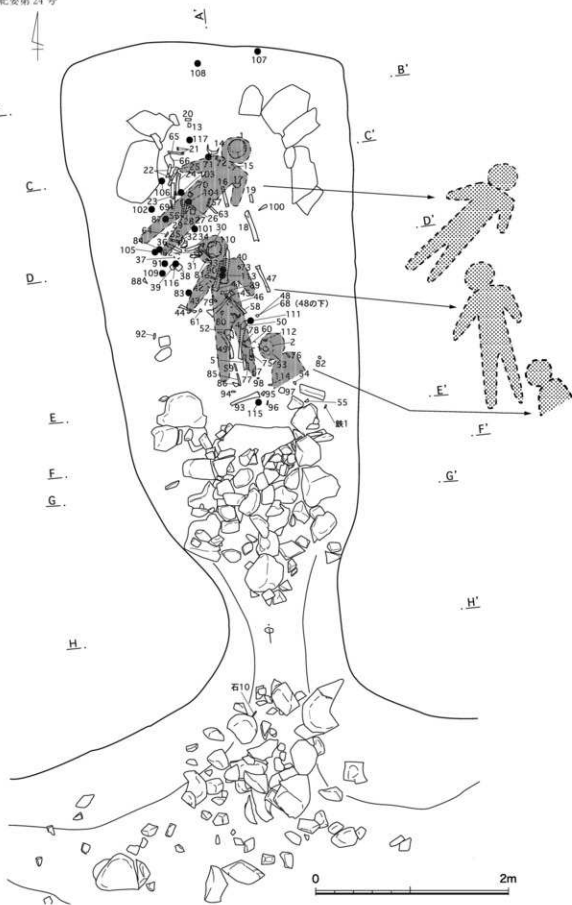
4. 分析結果

① 人骨資料と副葬品

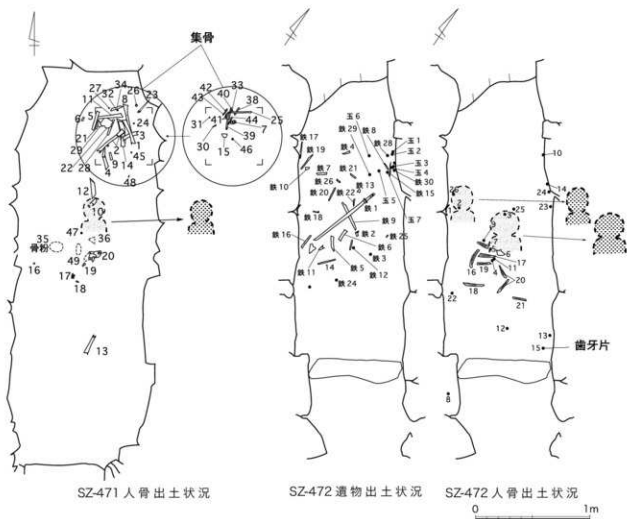
今回観察を実施した四十八塚古墳群出土人骨のほぼすべては破片状態のものである。また中には、粉化しているものも数十点ほど存在しているが、これらは取り扱わず、大きさ 5 cm 程度以上の部位同定が可能な資料のみを観察対象としている。

1) SZ-33

本石室では、大腿骨などの下肢骨片及び頭蓋骨片が 2 地点から出土している。このうち、頭蓋骨片や歯牙片が出土している地点と下肢骨片が出土している地点とでは約 70 cm の距離がある。そのため、奥壁付近に



第1図 SZ-33における人骨の出土状態 (『四十八塚古墳群』2011より転載)



第2図 SZ-471・472における人骨の出土状態 (『四十八塚古墳群』2011より転載)

頭骨を北向きに1体埋葬されていたと推定される。

さらに歯牙片が2つの地点から出土している。このうち2体は頭を奥壁に向けて北向きに頭位をとって埋葬されていたと考えられる。羨道に最も近い残りの1体については頭位が不明であるが、本石室に埋葬されている3体はいずれも成人個体であり、頭位を北向きにとる2体は、歯牙の咬耗から壮年と推定される (Broca I⁴¹⁾)。また頭位を北向きにとる2個体のうち、奥壁付近の成人個体は女性、玄室中央に位置する成人個体は男性と推定される。

また本古墳では、人骨以外の資料が出土しておらず、それぞれの被葬者に伴う副葬品については不明である。

2) SZ-471

本石室では、奥壁付近に下肢骨を中心とした集骨状態の埋葬が確認されており、下肢骨の中には、やや整状を呈する配置になっているものもある。集骨埋葬は1体以上の埋葬の可能性が高いが、このうち1体は成人男性と推定される。この他、奥壁に向かって、北に頭位をとると推される成人1体が出土している。

また石室入口の墓道部より頭が長くなり口縁端部の段を失う新段階のフラスコ形瓶が出土しており、7世

紀中葉頃の埋葬と考えられる（第5図23）。本石室では埴輪片、及び人骨以外の資料は石室から出土しておらず、副葬品と被葬者の関係は不明である。

3) SZ-472

本石室では、頭位が不明であるが、成人2体の埋葬が確認できる。この他、羨道付近において資料数は少ないものの歯牙が出土しているため、この部分にも1体埋葬されていたと考えられる。

本古墳では、埴輪は出土しておらず、扁平な提瓶と頭がまだ短く口縁端部に段を持つ古段階のフラスコ形瓶と、不均等両側の鉄刀と浅い鍔身間のある長頭阿刀鍔（刀と鍔いずれもTK209期頃）、頭が直立して口縁ラインが水平になった段階の平瓶と均等両側鉄刀と鍔身間の退化した長頭片刀鍔（7世紀中葉ころ）が出土しており、TK209 型式期～7世紀中葉ころまでの年代幅がある（第5図）。玄室からは鉄鍔・直刀などの鉄製品の他、弓金具が出土している。出土地点から鉄鍔・刀子・弓金具は成人2体の被葬者がそれぞれ保持しているが、直刀は玄室中央に埋葬されている被葬者にもみ伴うものと考えられる。このうち、直刀を保持している被葬者は、歯牙の咬耗から壮年と推定される（Broca I¹⁰）。

またサイズと出土地点の異なる耳環が2点出土しており、これらは2体分の装身具とみなされる。しかし、これら2点の耳環の出土地点からは人骨が出土していないため、この地点に、さらに数体の被葬者が埋葬されていた可能性がある。小玉はガラス製のものが83点出土しており、材質が異なるものが3点出土しているが、これらは石室東側および石室全体にちらばった状態で出土しているため、被葬者である人骨と関係は不明である。

4) SZ-473

本石室では、奥壁に向け頭位を北にとって埋葬されている成人2体が確認できる。この他、奥壁よりの西側側壁の一部より歯牙片が出土しており、埋葬姿勢は不明であるがここにも1体の被葬者が埋葬されていたと推定される。

遺存状態が不良であるため詳細は不明であるが、埴輪は出土しておらず、須恵器甕2片が確認されている。また副葬品として銅心銀張耳環が出土しており、その出土地点から、この副葬品は奥壁付近に埋葬されている被葬者のものと考えられる。

5) SZ-478

本石室では、頭を奥壁に向け頭位を北にとって埋葬されている成人3体が確認できる。このうち玄室中央に配されている被葬者は歯牙の咬耗、及び寛骨臼の大きさなどから壮年男性と推される。奥壁付近に埋葬されている被葬者の頭部から管玉やガラス製小玉の一部が出土していることから、これらの玉類を首飾りとして、また耳付近から出土している耳環を被葬者に着装させていたと考えられる。

さらに出土地点から、この被葬者は鉄鍔・直刀・櫛引手も保持していたとみなされる。その他の被葬者に伴うと考察される副葬品は確認できていないが、これはこれらの人物が副葬品を持っていなかったというよりは、追葬により移動したか遺存状態の悪さ等により副葬品として取り上げることができなかったためと考えておきたい。この他、羨道では下肢骨のみが配された状態で出土している。

以上、出土人骨を中心に被葬者に関する考察を実施した。また次節以降において、内部主体である石室及び副葬品の一部である小札を取上げ、被葬者像を考察するための考察を深めることとする。（谷畑）



第3図 SZ-473・SZ-478における人骨の出土状態（『四十八塚古墳群』2011より転載）

② 横穴式石室からみた四十八塚古墳群の様相

四十八塚古墳群の横穴式石室は平面形から大きく二つに分類される¹⁷⁾。

一つは、無袖型で長方形の玄室を持つ石室（無袖型長方形）である。玄室と羨道の側壁が一直線に接続し、石室幅の変化による区画はないが、床面の仕切、段差等で玄室と羨道を区画している。天井は残存するものがなく、特徴が不明確である。玄室は奥側の方が幅広のものと同じ幅のものがある。

もう一つは、両袖型で側壁が曲線を描く胴張形の玄室を持つ石室（両袖型胴張形）である。玄室と羨道の区画が、羨道幅を狭めることによって行われる。他の古墳群では羨道幅はそのままで側壁の一部を突出させることによって区画する疑似両袖型もある。立面的には、多段積みで立柱石を持たない素形と立柱石を持つ玄門形があるが、四十八塚古墳群では立柱石を持つ袖部は見られない。足利市域の横穴式石室では天井は袖部で段差を持つもの、斜めに低くなるものがある。四十八塚古墳群では天井が残存するものはない。

SZ - 472、SZ - 478は無袖型長方形、SZ - 33、SZ - 471、SZ - 473、SZ - 480は両袖型胴張形、SZ - 335は両袖型である。SZ - 479は主体部の石材が確認されたが詳細は不明である。SZ - 01、SZ - 02、SZ - 32、SZ - 81、

SZ-100、SZ-489、SZ-562は周溝のみの確認で、主体部は確認されていない。

確認された中で最大の規模を持つのは、SZ-478の横穴式石室である。無袖型長方形で、全長5.6m、玄室長4.0m、奥壁幅1.05m、羨道前幅0.75mである。側壁は石灰岩の割石を平積みしている。裏込めに石灰岩の割石を多量に使用する。玄室床面の敷石にはチャートと石灰岩角礫が使用される。床面には玄室と羨道の境に、仕切となる細長い石が置かれるが、段差は小さく、入口に向かって緩やかに高くなる。入口周辺は低くなるが、墓道は舌状を呈し、周溝に接続しない。無袖型長方形で類似する形態の石室には、黒袴台SZ-860がある。

確認されたもう1基の無袖型長方形のSZ-472は、SZ-478に比べると規模が小さく、全長3.5m、玄室長2.6m、奥壁幅0.7m、羨道前幅0.8mである。石灰岩の割石を使用しているが、側壁最下段を縦置きしている。このため、同じ無袖型長方形としたSZ-478とは別系譜の可能性がある。玄室床面の敷石にはチャートが使用されるが、羨道には平石が一枚残るのみである。周溝に接続する墓道はない。

最大の規模の無袖型長方形のSZ-478に次ぐ規模を持つのは、両袖型胴張形のSZ-33である。全長5.0m、玄室長3.5m、奥壁幅1.0m、最大幅1.5m、羨道前幅0.9mである。側壁は石灰岩の割石を横積みしている。裏込めに石灰岩の割石を使用する。玄室床面の敷石にはチャートが使用される。床面には玄室と羨道の境に、仕切となる細長い石が置かれ、羨道は段差を持って高くなる。入口周辺は羨道より低くなり、周溝に接続する墓道がある。石室前面の周溝は周囲に比べて深く、覆土上位に石室の石材が散乱する。

両袖型胴張形でSZ-33に次ぐ規模を持つのはSZ-471である。全長4.7m、玄室長3.4m、奥壁幅0.8m、最大幅1.1m、羨道前幅0.9mである。側壁は石灰岩の割石を横積みしており、玄室中央中位の石が最も大きい。裏込めに石灰岩の割石を使用する。玄室床面の敷石にはチャートが使用される。床面には玄室と羨道の境に、仕切となる細長い石が置かれ、羨道は段差を持って高くなる。入口周辺は羨道より低くなり、周溝に接続する墓道がある。羨道前面から墓道にかけての底面に埴土がある。石室前面の周溝は周囲に比べて深い。

両袖型胴張形でSZ-471に次ぐ規模を持つのはSZ-480である。全長4.1m、玄室長2.7m、奥壁幅0.8m、最大幅1.2m、羨道前幅0.6mである。側壁は石灰岩の割石を横積みしている。裏込めに石灰岩の割石を使用する。羨道最下段の石に横長の大きめの石を使う。玄室床面の敷石にはチャートが使用される。床面には玄室と羨道の境に、仕切となる細長い石が置かれ、羨道は段差を持って高くなる。入口周辺は羨道より低くなり、周溝に接続する墓道がある。石室前面の周溝は周囲に比べてやや深い、周溝の幅が狭く小規模であるため、SZ-33やSZ-471ほど深くない。

確認された中で最小の規模を持つのは、SZ-473の横穴式石室である。全長3.4m、玄室長2.4m、奥壁幅0.9m、最大幅1.0m、羨道前幅0.7mである。側壁は石灰岩とチャートの割石を横積みしている。左右側壁で袖部の石の使い方が異なる。左側壁が床面の仕切石の位置より奥側で幅を狭めているのに対し、右側壁は横長の石の入口側に床面の仕切石が位置し、幅も狭めていない。このため、無袖型か片袖型のように見えるが、最大幅が玄室中央にあることから両袖型胴張形と考えられる。掘り方と側壁石材の間が狭く、裏込めには石が詰められるが、掘り方が小さいため、少ない。玄室床面の掘り方上には直接チャートの割石が敷かれる。袖部と入口の二ヶ所に仕切となる細長い石が置かれ、その間を埋めるように大きめの割石を詰めるが、仕切石はその大きさが石室幅に満たないため、隙間があったり、複数だったりしている。その上には底面の割石より小さめの敷石、やや大きい閉塞石が載り、羨道は段差を持って高くなる。入口周辺は羨道よりわずかに低くなり、周溝に接続する墓道がある。石室前面の周溝は周囲に比べてわずかに深い、SZ-33

やSZ-471ほど深くない。

SZ-335は側壁の校正の削平によって失われた部分が多いため、両袖型であること以上に断定できない。全長4.4m、玄室長3.1m、奥壁幅1.5m、最大幅1.8m、羨道前幅0.9mである。側壁の残存と思われる石灰岩の割石が外縁近くに分布している。玄室床面相当部分にはチャートの敷石と思われる石材が多い。羨道は玄室より高かったと思われ、その分だけ削平により側壁、敷石の消失部分が多い。周溝も全周せず、一部にそれと推定される落ち込みが残りのみで、周溝まで突き抜ける墓道は確認できない。

四十八塚古墳群では、足利・佐野市域に分布する、機神山山頂古墳のような無袖型胴張形石室、正善寺古墳のような両袖型長方形石室は確認されていない。無袖型長方形の石室は少なく、両袖型胴張形の石室が主体を占め、後期群集墳的な均質な様相を呈すると言える。しかし、前澤輝政氏調査による出流原5号墳は無袖で胴張があったと報告されているので、他の類型の石室の存在を否定できない。(中村)

③ 小札甲を出土する群集墳としての四十八塚古墳群

四十八塚古墳群は、小札甲を副葬することが注目できる。小札甲を出土した四十八塚古墳群SZ-334とSZ-335の2基は、後期群集墳の中に存在する中小規模の円墳で、他の古墳とくらべて特に規模が大きいわけではない。

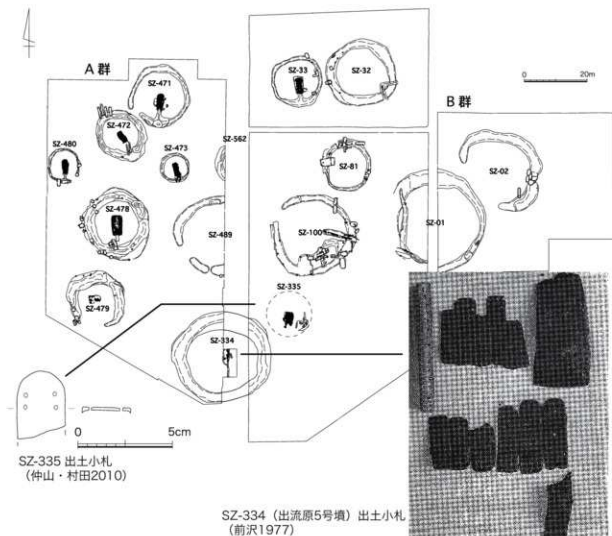
四十八塚古墳群SZ-334は墳径25mの円墳で、これと同一古墳(仲山ほか2011, pp. 25, 513)と考えられる出流原5号墳は、耕地区画整理の道路建設にともなう1954年の調査で横穴式石室から小札甲が出土している(前澤1955・1977)。小札甲の詳細は報告されていないが、公表された写真から判断すると臍孔1列の偏円頭形で礼幅がやや広くと見られるので、後期第3段階(内山2006)、つまりTK43型式並行期・6世紀後葉ころの可能性がある。1954年の調査では古墳時代人骨4体(成人男性3・成人女性1)・小札甲・鉄鏃12・耳環3・轡1・小刀2・勾玉1・丸玉1・小玉75・滑石製紡錘車出土し、高速道路建設に先立つ2005・2006年調査では、埴輪多数・鉄鏃1・鉸具2が出土した。

四十八塚古墳群SZ-335は径15m以下の小円墳と推定され、高速道路建設に先立つ2005年の調査で小札甲が出土した。小札は臍孔2列の円頭形で、6世紀に多い種類であるが、破片1点だけなので詳しい時期を検討することは難しい。SZ-334とSZ-335の小札は種類が異なるので、SZ-334から隣接するSZ-335の石室へ二次的に小札が移動混入したものではなく、それぞれの石室に小札甲が副葬されていたことがわかる。

後期群集墳の中小円墳に小札甲を副葬することは、群馬県域と、それに隣接する栃馬県域西部と埼玉県域北部、つまり北関東西部に目立つ特色である。栃馬県域西部の後期群集墳では、足利市明神山古墳群でも小札甲が出土している(前澤1979)。群馬県域では伊勢崎市蟹沼東古墳群や高崎市山名古墳群(山名原口I・II遺跡)、埼玉県域では神川町青柳古墳群が代表的な事例で、それぞれ墳径10～20m級の複数基の円墳に小札甲を副葬している。

倭における古墳後期の馬具・甲冑・装飾大刀出土古墳数をみても、群馬県域を中心とする北関東西部で最も多く、群集墳での出土例も目立つ。軍事関係者の層が厚く、小札甲の所有・副葬に対する規制が緩かったのだろう。

北関東西部以外の地域では、群集墳中の一般的な円墳から小札甲が出土することはきわめてまれである。このような地域差の背景については、次章で検討を行う。(内山)



第4図 群集墳から小札甲が出土する四十八塚古墳群 (1/1,200)

5. 結果と考察

四十八塚古墳群は6世紀後半から7世紀前半に築造されたもので、計16基の古墳は大きく3つに分けられている。

初期に造営されたSZ-334, SZ-478は墳丘規模が大きく、SZ472からSZ33, SZ471, SZ473, SZ480と新しくなるにつれた墳丘規模は小さくなる。これは報告書にあるように周溝を回避しているためと考えられる。また横穴式石室のほとんどは両袖型のものであり、無袖型長方形のものはSZ-472, SZ-478と少なく、なっている(SZ-33, SZ-471, SZ-473, SZ-480は両袖型胴張形、SZ-335は両袖型)。

四十八塚古墳群の中でも今回取り上げた5基(SZ-33, SZ-471, SZ-472, SZ-473, SZ478)の中でも、最古の造営とされるのはSZ-478である。

SZ-478(無袖型長方形)は、埴輪を持っており、本古墳群の中では最も古い古墳である。また埴輪の中には十字文楕円形鏡板付轡を表現する馬形埴輪(第5図2)が含まれている。

被葬者の人数は成人3-4体程度とみなされ、他の古墳に比して多いというわけではない。埋葬順序は、羨

道側、中央、奥壁と推定される。しかし、副葬品の一つである玉類は豊富に出土しており、奥壁付近に埋葬されている被葬者の頭部から管玉やガラス製小玉の一部が出土していることから、これらの玉類を首飾りとして、また耳付近から出土している耳環を被葬者に装着させていたと考えられる。

また周溝覆土中から TK43 型式でもやや古い特徴を持つ須恵器甕が出土している。さらに鉄鏝には TK10 型式期から TK217 型式期のものが出土しており、年代幅がある（第 5 図）。鉄鏝の多くは奥壁付近から出土しており、直刀の配置などから見ても奥壁付近にもう一体埋葬されていた可能性がある。また出土地点から、奥壁付近の被葬者は鉄鏝・直刀・轡引手も保持していたとみなされ、他の 2 人の被葬者よりも副葬品が多くなっている（3）。しかしそれぞれの被葬者の性別や年齢は不明である。

石室の規模が次いで大きいのは SZ-33（両袖型胴張形）である。本石室に埋葬されている 3 体はいずれも成人個体であり、頭位を北向きにとる 2 体は、歯牙の咬耗から壮年と推定される。埋葬順序は羨道側、奥壁側、中央と推定される。

頭位を北向きにとる 2 個体のうち、奥壁付近の成人個体は女性、玄室中央に位置する成人個体は男性と推定されている。しかし、人骨以外の資料が出土しておらず、それぞれの被葬者に伴う副葬品については不明である。

3 番目に大きな規模を持つのは SZ-471（両袖型胴張形）である。本石室では、奥壁付近に下股骨を中心とした集骨状態の埋葬が確認されており、下股骨の中には、やや盤状を呈する配置になっているものもある。集骨埋葬は 1 体以上の埋葬の可能性が高いが、このうち 1 体は成人男性と推定される。この他、奥壁に向かって、北に頭位をとると推される成人 1 体が出土している。

また石室からではなく墓道から頭が長く葬送儀礼の際に使用されたとみなされる瓶が出土している。このガラス瓶は、口縁端部の段を失っている新段階のものであり、7 世紀中葉頃に埋葬行為を行われたことを示すものである。人骨の配置からみて数回の片付けがなされていることは明らかであるが、被葬者は基本的に玄室中央に埋葬されている。本石室では人骨以外の資料は出土しておらず、副葬品と被葬者の関係は不明である。

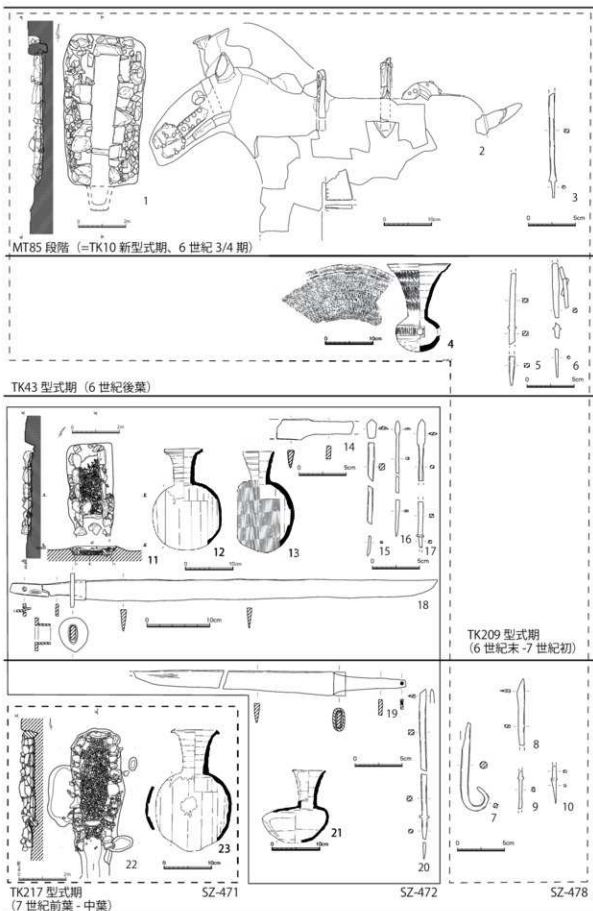
SZ-472（無袖型長方形）は規模が小さいが、被葬者は成人 3 体と考えられる。人骨の配置からみて数回の片付けがなされているが玄室中央に埋葬するのが基本と考えられる。玄室からは鉄鏝・直刀などの鉄製品の他、弓金具が出土している。出土地点から鉄鏝・刀子・弓金具は成人 2 体の被葬者がそれぞれ保持しているが、直刀は玄室中央に埋葬されている被葬者にのみ伴うものと考えられる。このうち、直刀を保持している被葬者は、歯牙の咬耗から壮年と推定される。

またサイズと出土地点の異なる耳環が 2 点出土しており、これらは 2 体分の装身具とみなされる。しかし、これら 2 点の耳環の出土地点からは人骨が出土していないため、この地点に、さらに数体の被葬者が埋葬されていた可能性がある。

小玉はガラス製のものが 83 点出土しており、材質が異なるものが 3 点出土しているが、これらは石室東側および石室全体にちらばった状態で出土しているため、被葬者である人骨との関係は不明である。

この他、年代を認識できる遺物があり、扁平な提瓶と、頭がまだ短く口縁端部に段を持つ古段階のフラスコ形瓶と、不均等両側の鉄刀と、浅い鎌身間のある長頭両刃鏝（いずれも TK209 期頃、第 5 図 12～18）、頭が直立して口縁ラインが水平になった段階の平瓶および均等両側鉄刀と鎌身間の退化した長頭片刃鏝（7 世紀中葉ころ、第 5 図 19～21）が出土しており、年代幅があることは明らかである。

SZ-473（両袖型胴張形）は四十八塚古墳群の中でも規模が最小のものである。本石室には 3 体の成人個体が



第5図 四十八塚古墳群 SZ-471・472・478 出土遺物の年代幅 (仲山他 2011 年から作成)

埋葬されている。人骨の配置からみて数回の片付けがなされているが玄室中央に埋葬するのが基本と考えられる。また、副葬品としては銅金銀張耳環が出土しており、その出土地点から、奥壁付近に埋葬されている被葬者のものと考えられる。

このように石室の規模には大小があるが、被葬者の人数は3人程度が基本となっているが、副葬品の被葬者との関係を認識するための十分な資料が存在しない。しかし、主体部の規模が大きく奥壁付近の被葬者では副葬品が多くなっており、その他の古墳においても奥壁付近の初葬の人物に対して、特別な扱いがあるのかもしれない。また四十八塚古墳群では確認されていないが、栃木県中央部に位置する古墳では周溝内埋葬が確認されることがある。石室内への追葬が確認できる四十八塚古墳群において周溝内埋葬が確認できない理由として、こうした周溝内埋葬は、追葬と一部機能的に重なるものであると考えることが可能である。周溝内埋葬は栃木県中央部の琴平塚5号墳(中村2004)、宇都宮市聖山公園6号墳(梁木1993)、小山市飯塚38・43号墳(鈴木1999)で見られるが、それらでは中心主体部が横穴式石室墳であるのに敢えて周溝内へ埋葬されている。このような場合には、その横穴式石室が地下式若しくは小規模であるため、追葬が不可能・困難であったことによる物理的理由が想定できる。一方、下野市石橋横塚古墳(下野市教委2015)のように巨大な横穴式石室を持ちながら周溝内埋葬が行われている場合には石室内への埋葬と区別するための社会的理由が想定される。

例えば、四十八塚古墳群より新しい7世紀中葉から8世紀にかけて形成された多功南原遺跡第1区の墳墓群(栃木県内務部上三川町)では、7世紀中葉の大形方墳である多功大塚山古墳の南側で、側壁挟り込み土坑墓6基と木棺墓1基が調査されている(山口・及川・藤原1999)。このうち側壁挟り込み土坑墓SK-727には、あまり高齢でない成人女性が、骨化した後に動かされた状態で埋葬され、一對の耳環が副葬されていた(茂原・芹澤1999)。栃木県域中央部・南部において古墳の周溝内埋葬としても数多く造営された側壁挟り込み土坑墓が、耳環を着装する階層の再葬施設に用いられていた事例と考えられる(中村2004, p.192; 水野他2014, p.67)。四十八塚古墳群において、こうした周溝内埋葬が確認できない理由は不明であるが、当時の埋葬習慣まで考慮しつつ考察していく必要がある。

さらに副葬品との関係は一部の被葬者を除いて不明であり、性別や年齢による副葬品との関係を見ることはできていない。しかし副葬品の中には特殊なものもあり、ここでは小札甲を中心に考察を進めている。

小札甲が副葬されている古墳のうちSZ-334では、1954年の調査で男性3体・女性1体の成人人骨が出土している。甲冑は男性被葬者に副葬されることが知られている。甲冑・裝飾大刀・裝飾馬具などはその古墳を築造する契機となった初葬の被葬者に伴う副葬品と解釈される場合が多い。しかし、副次的被葬者や追葬者に甲冑が副葬される事例も古墳時代を通じて一定数が認められる(内山2015)。

小札甲の副葬にはある種のパターンがある。すなわち鉄製小札甲は製作に莫大な手間と材料を要するので、墓に副葬できる階層は限られている。

群集墳の中に位置する最大規模の「盟主墳」つまり前方後円墳や大円墳から甲冑が出土する場合はあっても、通常規模の円墳からは出土せず、小札甲や冑を出土する後期古墳は、地域の首長墳つまり前方後円墳・大形円墳・有力横穴墓・裝飾横穴墓などである。すなわち、後期群集墳中の一般的な円墳から小札甲が出土することはきわめてまれであるが、北関東西部ではその限りではない。

四十八塚古墳群では小札甲を副葬している古墳(SZ-334とSZ-335の2基)が特に規模が大きいというわけではない。このように北関東西部では、群集墳の円墳被葬者層まで稀少な鉄製小札甲が供給・副葬される

場合があり、近畿中央政権による軍事編成が相対的に下層まで及んだためとみることができるのである。また、時期に近い多数の小形前方後円墳を群集墳内を含む東関東に比べると、群集墳に前方後円墳を含まない佐野地域の四十八塚古墳群や、群集墳内の前方後円墳が各世代に 1 基程度の足利・群馬地域では、墳形選択の自由度は低かったとみられる。このことも、近畿中央政権との関係の強さから理解できるかもしれない。

(谷畑・中村・内山)

6. まとめ

古墳時代の下野地域には三王山南塚 2 号墳に関係する首長層が台頭し、5 世紀末から 6 世紀前葉にかけて摩利支天塚古墳・琵琶塚古墳が築造され、後期には横塚古墳・御鷲山古墳・下石橋愛宕塚古墳、終末期には切石種の横穴式石室をもつ大形円墳が築造される地域（丸塚古墳・壬生車塚）と大型方墳が築造される地域（多功大塚山古墳・多功南原 1 号墳）に分かれている。

四十八塚古墳群の墳丘径は 10 - 20 m であり、古い古墳のほうが墳丘規模あるいは内部主体は大きい傾向にある。内部主体が確認できているものすべては横穴式石室であり、石室の規模に関わらず、被葬者数は約 3 人となっている。また四十八塚古墳群の中には中世以降に墓として使用されていた古墳 (SZ-334) がある。またこうした例は佐野市域近辺では確認できていないが、黒袴台遺跡のように群集墳と中世墓域が重なる事例は報告されている。

以上、細片状の人骨を対象に、そこに含まれる人類学的な情報を提示し、被葬者の埋葬状況や被葬者像に関する考察を行った。今回観察を実施した石室では、奥壁付近羨道にかけて歯牙や下肢骨などの骨片が数点散らばった状態で出土している。また、頭蓋骨片と下肢骨片の出土地点から被葬者の頭位や人数などを明らかにすることができている。

繰り返しになるが、古墳時代の埋葬遺構から出土する人骨は、ごく一部の例外を除いて遺存状態が不良なため、形態的特徴を把握できる資料は限定されている。そのため、性別や年齢などといった被葬者に関する基本的情報を抽出することが難しく、結果として被葬者である人物像を考察することが不可能なため、縄文時代や弥生時代の人骨のように形態的特徴に関する地域差や時期差についての議論が進められずにいる。

また、古墳に埋葬されている被葬者についても人骨資料から考察した研究は極めて少ないのが現状である。そして古墳の出土人骨の多くは、人類学的な研究の対象資料にもなっていないのである。

特に副葬品とその被葬者をあわせた研究は、複数個体が埋葬された遺構の場合、難しい面が多い。これは数回にわたって実施された追葬により、被葬者である人骨の埋葬位置が意図的に移動されているためだが、筆者のこれまでの経験によれば、古墳の埋葬人骨は破片状態という特徴がつかみづらい状況ではあっても、歯牙などの一部の部位はほとんど移動させられておらず（細片過ぎるために持ち運びの対象にならなかつたと推測される）、原位置を保ったままの状態でも出土することが多い。

このため、被葬者の一部である人骨片を、発掘調査時に、1 点ずつ出土地点を記録してとりあげ、その後、それらを観察することで、被葬者やその埋葬状況について、考察を進めていくことは可能である。

また本稿で試みたような研究は、基本的に、発掘現場において詳細な取上げ作業が実施された場合においてのみ、可能となる。これまで古墳の出土人骨については、遺存状態が不良なことが多いため、人類学的には注目されることが少なかったが、今回、たとえ遺存状態のよくない資料であっても、出土地点を記録し、地道な同定作業を行うことで、被葬者と副葬品に関するコラボレーション的な研究ができることが明らかになった。すなわち、古墳や横穴の発掘調査にあたっては、一見、人骨の遺存状態が不良であっても、1 点ご

との取上げが実施されなければならないのである。

また遺存状態が不良な個体であっても、歯牙はほとんどの場合、遺存しており、そこには病的所見が残されていることがある。これらの病気の所見はその人物が罹患した疾患のすべてを物語るわけではなく、死因を特定できるものはまれである。しかし、骨髄炎など比較的出现頻度の高い所見を中心に観察を進めていくと、被葬者像を考察する上で重要な手掛かりとなることがある。

本稿において分析対象としたのは、大きさが約5 cm以上の人骨資料である。これ以下の大きさ、または部位同定が不可能な資料については、今回は観察対象とはしなかった。さらにより微少な破片資料であっても、理化学的分析によって年代や食性に関する情報を提示できる場合もある(米田 2015)。そのため、観察対象とする資料が破片状態であっても、私たちは手抜きなく、それに対峙しなければならないのである。また現段階では被葬者の人数等についての考察は、試論の域を出ない部分が多くなっている。そのため、今後調査事例を増やしつつ考察を深めていきたいと考えている。

(谷畑・中村・内山)

本稿の執筆は谷畑、中村、内山が行った。執筆分担者は各項の最後に記してあるが、見解や文章については3人で協議を行い、内山が全体を調整した。

謝辞 本稿を執筆するにあたっては下記の方々のお世話になった。亀田幸久・進藤敏雄・中山英樹・村田沙織(とちぎ未来づくり財団)・宮代栄一(朝日新聞社)(敬称略)。中でもとちぎ未来づくり財団が実施した四十八塚古墳群の発掘調査では現場責任者・調査担当者・発掘調査補助員の方々に人骨資料の丁寧な取上げを実施していただき、古墳時代研究の被葬者に関する考察を推進させる手掛かりとなり、いかに現場の情報が大切かを再確認するものとなった。記して感謝の意を表することとする。

註

- (1) 歯牙の咬耗の程度は、必ずしも正確な年齢を提示するとは言えないが、一般に最も遺存しやすい歯牙の咬耗から年齢推定されている。Broca I は成年から壮年、Broca II は壮年後半から熟年に相当するものとなる。
- (2) 報告書ではSZ-33 が両袖型駒張形、SZ-471、SZ-473、SZ-480 は無袖型駒張形とされている。筆者は、袖部の屈曲が弱く、玄室前幅と羨道奥幅の差が小さいため、無袖型に見えるものでも、玄室と羨道の側壁の石材の積み方に違いがあるものや、駒張りの描く曲線が玄室だけで羨道が直線的なものは両袖型とみなした。
- (3) 台形間の長頭畿(TK10-MT85 型式期か) 一頭基部がさほど細くない点でTK43 型式でもやや古い特徴を持つ須志器種一級身間が退化した片刃長頭畿と髷の「戴手引手」の破片(TK-217 型式期か) までの年代幅がある。

参考文献

- 秋元陽光・大橋泰夫 1988 「栃木県南部の古墳時代後期の首長墓の動向—思川・田川水系を中心として—」『栃木県考古学会誌』第9集、栃木県考古学会
- 秋元陽光 2007 「河内郡における終末期古墳」『栃木県考古学会シンポジウム 上神主・茂原官衙遺跡の諸問題』栃木県考古学会
- 阿部知己 1998 「小規模古墳における周堀内大型土壌に関する一考察」『峰考古』第13号、宇都宮大学考古学研究会

- 石川正之助 1981『高塚古墳』『群馬県史』資料編3 原始古代3、群馬県史編さん委員会
- 市橋一郎・大澤伸啓・足立佳代 1992「足利市域における古墳調査の状況」『唐澤考古』第11号、唐澤考古会
- 市橋一郎・大澤伸啓・足立佳代・斎藤和行 1996『口明塚古墳発掘調査報告書』足利市文化財調査報告第31集、足利市教育委員会
- 井上唯雄 1987「第4章古墳 二ツ山古墳」『新田町誌』第2巻 資料編(上)、新田町
- 内山敏行 2006「古墳時代後期の甲冑」『古代武器研究』第7号、古代武器研究会
- 内山敏行 2011「栃木県城南部の古墳時代馬具と甲冑」『しもつけ古墳群—下毛野の霸王、吾妻ノ岩屋から車塚へ—』平成22年度壬生町歴史民俗資料館企画展 壬生町歴史民俗資料館
- 内山敏行 2015「武器・武具から探る—古墳時代の人びと—」『公開シンポジウム 古墳に埋葬された被葬者像を探る—ヒトとモノからの考察』日本先史文化研究所
- 梅沢重昭 1995「毛野から上毛野へ」『武蔵国造の乱 考古学で読む『日本書紀』』大田区立郷土博物館
- 江原英・大野淳史 2012「木村古墳群」『県営園地整備事業に伴う埋蔵文化財確認調査・工事生活会要報告書—平成21～23年度緊急雇用創出事業に係わる整理作業報告書—』栃木県埋蔵文化財調査報告第344集、栃木県教育委員会・(財)とちぎ未来づくり財団
- 大川 清 1963「唐沢山ゴルフ場強跡」『栃木県佐野市安藤山麓古代宗業遺跡』佐野市教育委員会(大川 清1976「唐沢山ゴルフ場強跡」『下野の古代宗業遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第18集、栃木県教育委員会に再録)
- 大橋泰夫 1990「下野における古墳時代後期の動向—横穴式石室の分析を通して—」『古代』第89号、早稲田大学考古学会
- 大和久震平・加藤隆昭 1971『大平町七廻古墳群』大平町教育委員会
- 大和久震平 1972「第5章 古墳文化」『栃木県の考古学』吉川弘文館
- 大和久震平 1974『七廻り鏡塚古墳』大平町教育委員会
- 小片彦彦 1981「日本古人骨の疾患と損傷」『人類学講座』5、雄山閣、pp.189-228
- 木村 等・大橋泰夫 1986『星の宮神社古墳・米山古墳』栃木県埋蔵文化財調査報告第76集、栃木県教育委員会
- 草野潤平 2015「横穴式石室からみた東北・関東の交流—阿武隈流域を中心として—」菊地芳樹代表『阿武隈川流域における古墳時代首長層の動向把握のための基礎的研究』福島大学行政政策学類
- 倉田芳郎 1972「西方山古墳群」『東北縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』栃木県教育委員会
- 栗原有未・松浦真由美・出居 博 2003『ムジナ塚遺跡』佐野市埋蔵文化財調査報告書第26集 佐野市教育委員会
- 小池一之・鈴木毅彦 2000「鬼怒川低地」『日本の地形4 関東・伊豆小笠原』東京大学出版会
- 小池一之・吉永秀一郎 2000「八溝山地」『日本の地形4 関東・伊豆小笠原』東京大学出版会
- 今平利幸他 1985「宇都宮市岩木町権現山古墳墳丘測量及び石室測量調査報告」『峰考古』第5号、宇都宮大学考古学研究会
- 斎藤 弘 1989「足利明神山古墳群の築造年代について」『唐澤考古』9、唐澤考古会
- 斎藤 弘・中村享史 1992「足利明神山古墳群の形成過程について」『研究紀要』第1号、(財)栃木県文化振興事業団
- 茂原信生・芹澤雅夫 1999「第2節 SK-727出土の人骨」『多功南原遺跡 理化学分析編』栃木県埋蔵文化財調査報告第222集、栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団、pp.9-10
- 下野市教育委員会 2015『横塚古墳発掘調査現地説明会資料(2015.3.18)』
- 進藤敏雄・村田沙織 2012『菅田古墳群—北関東自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告XXII—』栃木県埋蔵文化財調査報告第351集、栃木県教育委員会・(財)とちぎ未来づくり財団

- 鈴木一男 1999『飯塚古墳群Ⅲ―遺構編―』小山市埋蔵文化財報告第44集、小山市教育委員会
- 鈴木敏彦 2000『足尾山地と渡良瀬川』『日本の地形4 関東・伊豆小笠原』東京大学出版会
- 竹澤 謙・赤山容造 1973『栃木県矢板市境林古墳発掘調査報告書』栃木県教育委員会
- 栃木県古墳勉強会 2004『中山（掃門堂神）古墳調査報告』『栃木県考古学会誌』第25集、栃木県考古学会
- 栃木県古墳勉強会 2005『中山（掃門堂神）古墳調査報告2』『栃木県考古学会誌』第26集、栃木県考古学会
- 津野 仁 2012『甲塚古墳―重要遺跡範囲確認調査―』栃木県埋蔵文化財調査報告第343集、栃木県教育委員会・(財)とちぎ未来づくり財団
- 中村享史 1996『鬼怒川東岸城の横穴式石室』『研究紀要』第4号、(財)栃木県文化振興事業団
- 中村享史 2004『東谷・中島地区遺跡群4 琴平塚古墳群』栃木県埋蔵文化財調査報告第283集、栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 中村享史 2011『後期後半から終末期の下毛野』『古墳時代毛野の実像 季刊考古学別冊17』雄山閣
- 中村享史 2015『栃木県域の古墳編年』『シンポジウム 地域編年から考える―部分から全体へ―』第20回東北・関東前方後円墳研究会大会 発表要旨資料、東北・関東前方後円墳研究会
- 仲山英樹・村田沙織・亀田幸久 2011『四十八塚古墳群』栃木県埋蔵文化財調査報告第340集、栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 橋本澄朗・芹澤清八・仲山英樹・斎藤恒夫・竹前大輔 2001『黒袴台遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第261集、栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 前澤輝政 1982『毛野国の研究―古墳時代の解明―』上・下 現代思潮社
- 前澤輝政 1955『栃木県安蘇郡赤見町出流原古墳群調査概報』、pp.1-6
- 前澤輝政 1977『下野の古墳』栃の葉書房、pp.91-94
- 前澤輝政 1979『第一編 原始古代』『近代足利市史』第三巻 足利市発行、pp.35-183
- 水野順敏・柏崎広伸・新井潔・石川和弘 2014『大塚古墳群(B区)』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第87集、宇都宮市教育委員会、p.67
- 矢島俊雄他 1988『向原遺跡・寒沼遺跡・十二天塚古墳』佐野市教育委員会
- 山口耕一・及川真紀・森原睦美 1999『多功南原遺跡 奈良・平安時代編』栃木県埋蔵文化財調査報告第222集、栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団、pp.20-21,117-120
- 梁木 誠 1993『聖山公園遺跡 根谷谷台遺跡(古代・中近世編)』宇都宮市埋蔵文化財報告第31集、宇都宮市教育委員会
- 米田 穰 2015『食性分析から探る古墳時代の人々』『公開シンポジウム 古墳に埋葬された被葬者像を探る―ヒトとモノからの考察』日本先史文化研究所

研究紀要 第24号

発行 公益財団法人 とちぎ未来づくり財団
埋蔵文化財センター

〒329-0418

栃木県下野市紫 474 番地

TEL 0285 (44) 8441 (代表)

FAX 0285 (43) 1972

HP : <http://www.maibun.or.jp>

発行日 平成 28 年 3 月 29 日発行

印刷 下野印刷株式会社
